夢童

菅波　茂

フィリピン・レイテ島地滑り災害

2月17日朝。フィリピンのレイテ島で豪雨・地滑りによる災害が発生した。午後3時の段階で、あるメディアが「死者18人、行方不明者1000人以上か」と報道していた。レイテ島では、91年に死者約7000人を出した同様の災害が発生していた。迷わず医療チームの派遣を決めた。AMDAインドネシア支部も参加。両国の医療事情はよく似ている。「南々協力（開発途上国間の協力）」である。

AMDAの名誉顧問であるプリミティボ・チュア先生に国際電話でお願いした。「AMDA医療チームを受け入れてくれる被災地でのカウンターパート（受入団体）を探してほしい」と。数時間後に返答があった。「南レイテ医師会会長のマトゥ医師に公式に受け入れを承諾してもらった」と。プリミティボ・チュア先生は70歳、中国系フィリピン人で元フィリピン医師会長だった。人脈を使ってくれたのだった。

最大の問題は医師免許だった。フィリピンは災害時でも、フィリピンの医師免許を持たない外国人医師の診療を公式には認めていなかった。マトゥ医師に国際電話を入れた。

「日本人は95年1月の阪神大震災の時に貴国のラモス大統領が1カ月分の給料を神戸の被災者に寄付した事実を忘れていない。これによって日本とフィリピンの人たちとの心理的距離は近くなった。そのフィリピンの友が被災者になっている現実を無視できない。だから医療チームを派遣しているのだ。ただ医師免許の壁がある。ぜひあなたの医師免許と南レイテ医師会の権威のもとで活動させてほしい」と。「わかりました」と快諾が返ってきた。マトゥ医師は自らの病院を気にしながらもAMDAの医療チームの活動に付き添ってくれた。

AMDAは避難所と病院で、診察と健康診断、救援物資（医薬品・医療消耗品・生活物資）の配布を行った。避難所の一つ、クリストレイ高校には、約280世帯約640人の被災者が収容され、呼吸器系疾患（気管支炎、風邪）の他、肉親を亡くした精神的ショックからの不眠や不安症の訴えが多かった。315人を診察し、災害孤児に奨学金を寄付した。

もう一つの現地のカウンターパートは、フィリピンにおける社会開発活動に実績があり、マニラに事務所を置いている金光教平和活動センターだった。被災地の南レイテ州はセブアノ語圏で、公用語であるタガログ語圏ではない。セブアノ語圏出身の現地職員の参加は、不安定な政治環境や反日感情の下での活動に不可欠だった。

レイテ島は第二次世界大戦中の激戦地で、多くの日本人や現地の人が亡くなっている。今回の災害で亡くなられた人と併せた慰霊祭を、医療の提供と慰霊活動を組み合わせたAMDAの「魂と医療のプログラム」として続けたい。

（AMDA代表）

＝題字は筆者